5. 仙谷地区の分布調査報告
–妻木晩田遺跡第９次分布調査–

１．調査の目的

分布調査は、妻木晩田遺跡の全体像を現況から把握することを目的とし、調査の成果は将来の重点調査や内容確認調査を行う上での手がかりとなるものである。

今年度の調査では、仙谷地区を対象とし、発掘調査の及んでいない尾根や斜面地、谷部の現況を把握するために踏査を行うこととした。

前年度までの分布調査では、現地形に落ち込みやマウンド状の高まり、平坦地などの存在が指摘されていることから、今年度も同様な地形を念頭に調査を行うこととした。また、仙谷地区においては、住居跡等の生活関連遺構が確認されておらず、洞ノ原地区東側丘陵の弥生時代後期前葉の墳墓群に後続する墓域と考えられることから、墳墓の存在も想定し踏査を行った。

調査期間は、平成18年１月16～17日の２日間である。

２．調査の概要

(1) 仙谷地区の概要

仙谷地区は、妻木晩田遺跡の北西部にあたり、東西にのびる「妻木丘陵」の西端に位置している。調査区は、第１次調査時に１区・２区が設定されており、弥生時代後期中葉～終末期の墳丘墓が６基確認されている（仙谷２～７号墓）。２区から鞍部を挟んだ西側の丘陵頂部には、妻木晩田遺跡における最大規模の四隅突出型墳丘墓である仙谷１号墓が位置している（門脇1994）。

本地区の植生は、落葉広葉樹や常緑広葉樹の混交林であるが、ルート②・⑥周辺の斜面地や谷部などにはシダ類が繁茂しており、丘陵の裾部にはササが広がっている。また、ルート⑤周辺にはスギが植林されている。

(2) 調査結果

以下、調査結果の概要について述べる。

文中のルート番号①～⑦は、第31図の番号①～⑦に対応している。

ルート①

１区から北にのびる尾根である。平坦地が７箇所認められた。

標高80ｍ付近では、最大長約９ｍ、最大幅３～９ｍの平坦地が３箇所連続していた。尾根の西側には、幅約２ｍ程度の段状に窪む地形が認められたが、東側に同様な地形は確認できなかった。この地形は、平坦地からの距離が一定ではなく斜面下方に続くことから、山道の可能性もある。

標高約60～80ｍ付近までは狭い尾根が続き、標高60ｍ付近で長さ５ｍ、幅７ｍの平坦地を確認した。

標高50ｍ付近では、最大長８～10ｍ、最大幅８～10ｍの平坦地が３箇所連続して認められた。平坦地の両側には、幅１ｍ程度のわずかに段状をなす地形が認められた。

丘陵裾部の標高30～40ｍでは、尾根上には段状に深くカットされた地形や階段状に平坦面が続く地形が認められた。ほとんど埋没していないことから、新しい時期に作出されたものである可能性が高い。

ルート②

１区から北西にのびる尾根である。

標高70～80ｍ付近では、平坦地を２箇所、標高約50ｍ付近では平坦地１箇所、径1.5m程度の浅い落ち込み２箇所が認められた。

ルート③

仙谷地区の２つの丘陵に挟まれた谷部である。

標高約50～60ｍ付近において、平坦地３箇所、径約1.5ｍの浅い落ち込み１箇所が認められた。

ルート④

仙谷１号墓の位置する頂部から、北に向かってのびる尾根である。平坦地が６箇所認められた。

標高70～80ｍ付近では、尾根上に最大長約９ｍ、最大幅５～６ｍの平坦地が４箇所認められた[1]。

標高60ｍ付近において平坦地を確認した。以前の分布調査で確認された古墳はこの位置にあたる（中原2001）。

やや下がって標高40ｍ付近でも、長さ９ｍ、幅５ｍの平坦地が認められた。

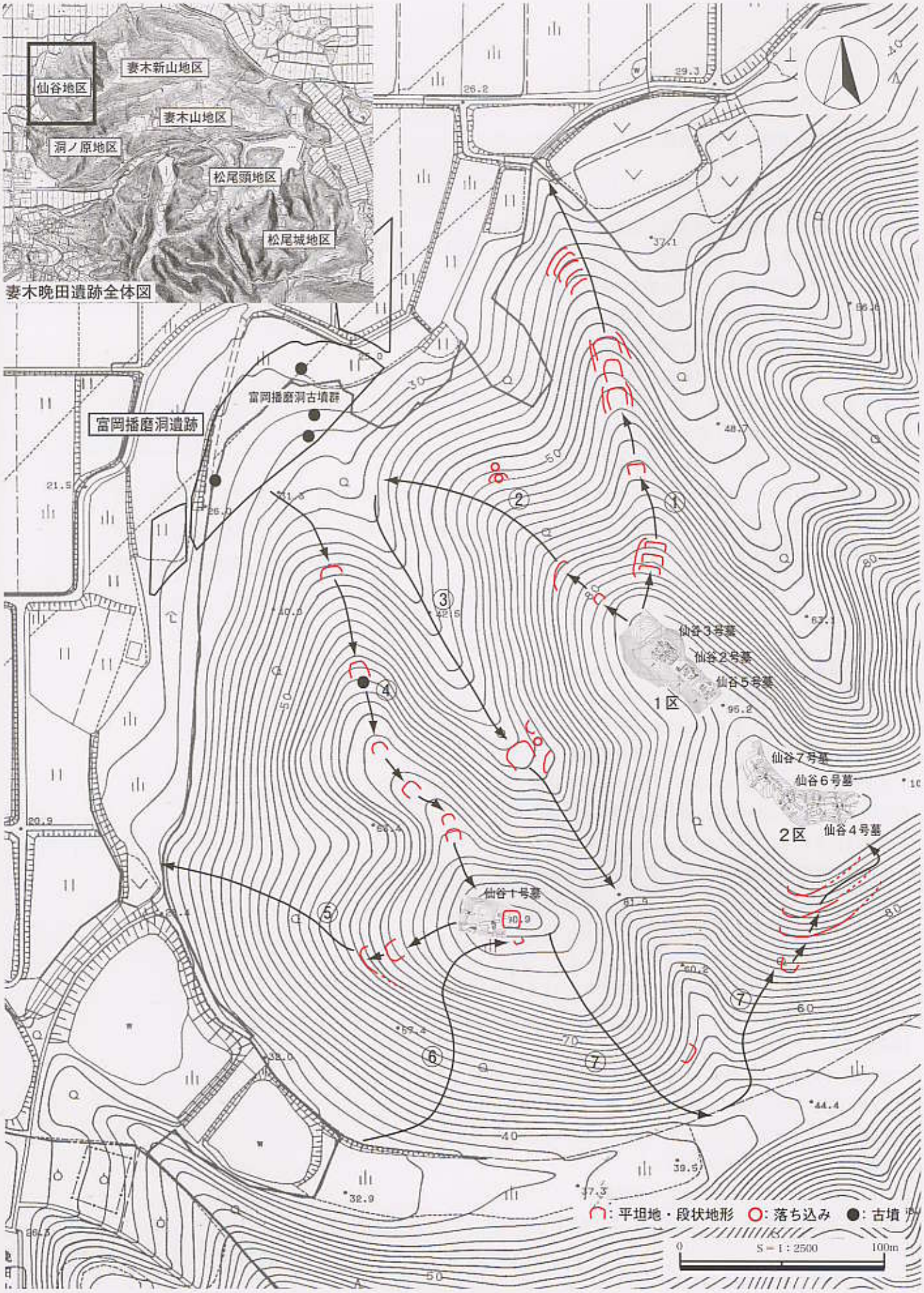
ルート⑤

仙谷１号墓の位置する頂部から西にむかってのびる尾根である。尾根幅が比較的広い斜面地となっている。

標高70ｍ付近で平坦地が１箇所認められた。ここからやや下がった地点では、狭い平坦地が等高線に沿うようにのびていた。

ルート⑥

仙谷１号墓の位置する丘陵から南西方向に下る斜面地



第31図　仙谷地区分布調査ルート図

である。急峻な斜面であり、遺構を示すような痕跡は認められなかった。

ルート⑦

仙谷１号墓から南東にのびる短い尾根と２区から南西にのびる尾根である。

仙谷１号墓の東側では、以前の調査で報告されている１辺約９ｍの方形の高まり（原田 2002）を追認した。その南には幅３ｍの段状地形が認められた。

１号墓から南東にのびる尾根は、倒木の広がりが顕著であり地形の観察は困難であるが、標高約 55 ｍで長さ９ｍ、幅４ｍの平坦地が１箇所認められた。

２区から南西にのびる尾根は、尾根幅がやや狭く両側が深い谷となっている。標高 70 ｍ付近に平坦地が認められた。標高 80 ～ 100 ｍにかけては、等高線に沿って幅の狭い段状の地形が認められ、折り返すように連続していることから山道の可能性がある。

３．まとめ

踏査の結果、仙谷地区の尾根上、斜面部、谷部において、平坦地や落ち込みの分布が認められた。

現況では、マウンド状の高まりなどの墳墓を示唆する地形は認められなかったが、弥生時代の墳墓が立地する１区から北にのびる尾根（ルート①）、仙谷１号墓から北にのびる尾根（ルート④）に平坦地が多く分布している点は注目される。

これらの地形の性格を明らかにすることが今後の課題である。　（長尾かおり）

【註】

(1) 2000（平成 12）年度に行われた測量調査においてもこれらの平坦地は確認されている（原田 2002）。

【参考文献】

門脇豊文 1994「妻木新山遺跡」『妻木山遺跡群試掘調査報告書―妻木新山遺跡・妻木山遺跡―』門脇豊文編、大山町教育委員会

中原斉 2001「分布調査について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2000』濱田竜彦編、鳥取県教育委員会

原田雅弘 2002「仙谷地区仙谷１号墓の測量調査報告」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』濱田竜彦編、鳥取県教育委員会